

## 私のおすすめ本

杉原茂 教授  
(経済政策論)

高度成長の時代 香西泰

日本評論社 1981年<sup>1</sup>

本書は、著者が中央官庁の「調査マン、エコノミスト、あるいはスタティシャン<sup>2</sup>として、曲がりなりにも日本経済の動きをみつづけてきたこと」を頼りに「1945年から[1980年あたり]までの日本経済の歩みを回顧したものである。」

官庁エコノミスト<sup>3</sup>として鳴らし国民所得統計の黎明期に辣腕を振るった人にふさわしく、経済理論を駆使した統計を縦横に引用しているが、本書で触れて欲しいのは、経済を分析するときの姿勢、現実の事象に迫る時の眼差しといったものである。

著者は、この時期を回顧する際の視角として、「決断に際しての人間行動の記録（ヒューマン・ドキュメント）への関心」と「人々の文明における不易と流行との関係への興味」を挙げている。後者も非常に重要な視点であるが、ここでは、特に、前者について紹介したい。

経済理論は論理的な演繹体系であり、実証分析は因果関係を析出するものであるから、経済分析を行っていると、すべては必然に見えてくる。しかし、技術的・経済的に当然のごとく実現したと思われる事柄でも、果敢に行動する人間がいなければ実現することはなかった。「マクロ的にみれば投資の伸びは当然であるにしても、それが実現するには経済主体の面で異常ともいえる適応努力を要した。設備投資の伸び 20%を支えることは、資本財・生産財産業は大幅な生産拡張を図らなければならず、そのためには多くの労働力がこの分野に吸収されて、なれぬ手つきで新しい作業に従事しなければならなかった。」最後のくだりは人の心を打つものがある。形式的には産業間労働移動に伴う労働の不効用ということではあるが、経済現象の背後にある人間の感じ方と行動に対する深い眼差しがある<sup>4</sup>。

---

<sup>1</sup> 絶版。その後日本経済新聞社からも出ていたがこちらも絶版。

<sup>2</sup> 統計家 (statistician) のことであろう。

<sup>3</sup> 今や死語になってしまった！

<sup>4</sup> こうした視角は、マルク・ブロックが技術革新についての人々のとらえ方 (popular mentality) の影響を決定的に重視することと通底するものがある。すなわち、技術自体は人類の歴史の始めから存在したが、そうした古くからある技術が実際に使われるようになったのは、技術自体のメリットによるものではなく、国家の盛衰や宗教的信条、公的権威の新しい形

また、現場にいる人間にとっては、すべてが自明なわけではない。自らを取り巻く諸条件、問題の所在、解決方法とその効果、他の経済主体の反応など、見通しの効かない不確実性の中でぎりぎりの判断を迫られることになる。

例えば、1950年代前半の合理化投資は、その効果が非常に大きかった反面、合理化投資をためらわせる様々な不確実性があった。それは、「①市場が狭隘で新鋭設備の稼働率向上が望めないこと、②新鋭設備により排除された労働力が二重構造をもたらし、低賃金を武器に新鋭設備と対抗するとみられること、③合理化投資は機械輸入を増大させるだけで国内市場を拡大しないことなど」であった。それは「高度成長期のように『投資が投資をよぶ』全面的な近代化とは異っていた。しかしそれだけに、その合理化を担当した企業の企業家精神が高く評価されるべきであろう。」

「高度成長は池田内閣によって始められたものではない。それは既に事実として存在していた高度成長を、単に容認しただけにすぎない。しかしそれはそれでたいしたことであった。人間の独創といってもそれほどはできない。・・・逆に現実への認識が立ちおくれたとき、いかに大きな代償が必要か[以下略]。」

こうした「ヒューマン・ドキュメント」に関連して、チャーチルの栗田中将評が思い出される<sup>5</sup>。チャーチルは言う。「[後付けで見ると成功目前であったレイテ湾突入作戦において栗田中将が作戦を途中で放棄した<sup>6</sup>理由は[確かに]不可解だ。[しかし、レイテへ接近するまでの3日間に]彼の艦隊の多くは[航空機の]爆撃を受け四散した[武蔵も撃沈された]。情報もなく、おとりの成否も米艦隊がどこにいるかも分からなかった。傍受した敵電報により[敵艦隊の動向を誤解した]。孤立し援護もなかった。・・・同じような困難を経験した者だけが彼の行動を判断することができる。」こうした意思決定者が置かれた状況に対する深い洞察力があつてこそ、チャーチルもあれだけの戦争指導を成し得たのであろう。

経済を分析する際も然りというべきだ。もちろん、あらゆる状況を追体験することなど不可能だが、経済のみならず、社会、文化・習俗、思想、芸術、技術的条件、物的環境、身体的状況、集団的心理など多様な局面から人々の行動を再構成して考えていくことが、経済分

---

態などが折り重なって実現したのである (Hughes, *The Obstructed Path*)。

<sup>5</sup> Churchill, *Triumph and Tragedy* (The Second World War, vol.6) .

<sup>6</sup> 第二次世界大戦のレイテ沖海戦において、日本海軍はフィリピンへの米軍の上陸を阻止するために、おとりによって米海軍を北方面へ誘い出し、その隙にレイテ湾へ突入する作戦を立てた。おとり作戦は成功したが、突入部隊を率いた栗田中将はレイテ湾前で反転して突入しなかった (戸高一成『海戦からみた日本の戦争』)。

析を真に説得力あるものにするを本書は示していると思う。

著者の自己規定は、「同時代を見通す「高い地位の人」（ヘーゲル『歴史哲学』）であったことはなく、資料の発掘と批判について、専門の訓練を受けたこともない。文字通り「高がスタチスト」（森鷗外『百物語』）であったにとどまる」というものだ。しかし、「素人歴史家は楽天的である」（森鷗外『伊沢蘭軒』）こともあって本書を執筆したとしている。そうした立場であるが、あるいはそうした立場だからこそ、当時の風潮や役所の内実などを豊富に盛り込んで、決断に際しての人間行動を生き生きと描き出している。

### Economic Possibilities of Our Grandchildren John Maynard Keynes

Macmillan 1931<sup>7</sup>

Essays in Persuasion の中の一編。論文集自体は喫緊の課題についての時論集であるが、'Economic Possibilities'は、遙か将来についてゆったりと思考を進め、厳密さは追求せずまた哲学的なものとなっていると著者は述べている。

著者の問題意識は、次のようなものである。「物質的欠乏や貧困などの『経済問題』<sup>8</sup>が「現在の我々の精神的・物質的エネルギーを消尽している」が、こうした『経済問題』は「一時的で不必要な混乱である。」「我々が持っている資源と技術をうまく利用するための経済組織を作り出すことができれば、・・・『経済問題』はもはや重要なものではなくなり」、「我々にとっての真の問題、すなわち人生と人間関係、創造と行為、宗教の問題が心と頭脳の領域を覆う（あるいは再び覆う）ような日が遠くない」将来に訪れる。

ケインズはブルームズベリー・クラブに所属していたので、哲学的・耽美的傾向を強く持っていたようだ<sup>9</sup>。私などは隠者的な考え方も好きなのだが、この'Economic Possibilities'については、時代を見る目を養うということを強調したい。

この文章が書かれた当時の状況は、「大恐慌と大量失業の中で、悲観論が世間を覆っていて、採るべき政策について間違った考えが跋扈している」というものであった。ケインズが

---

<sup>7</sup> 邦訳（ケインズ『説得論集』）が東洋経済新報社（ケインズ全集第9巻）や日本経済新聞社から出ていたようであるが、現在は絶版。文中の引用は私が原著から適宜訳した。

<sup>8</sup> 大文字の Economic Problems。なお、この『経済問題』に「階級間及び国家間の経済的闘争」が含まれているのは、当時のご時世と言うべきか。

<sup>9</sup> こうしたことを含めて、Dostaler, Keynes and His Battlesなどを参照されると良いと思う。

求めているのは、事象の表面下で何が起きているかを見失わないこと、物事のトレンドを正しく認識することだ。

現下の経済状況は悲観的なものであっても、長期的には大きな経済的可能性が開けると著者は見る。「記録が残る過去 2000 年の間、平均的な人の生活水準は大きくは変わらなかった。これは、技術が顕著に改善しなかったことと資本の蓄積に失敗したことによる<sup>10</sup>。」「16 世紀以降、複利の原理により、資本は想像を絶するほど増加した。技術革新も、科学と技術発明の偉大な時代である 18 世紀以降怒涛の勢いで生じている。」「これらの結果、人口の大幅な増加にもかかわらず生活水準は 4 倍になった。今後、人口はあまり急激には増加しないであろうし、技術革新も過去例をみないほど加速している。」

ややこじつけかもしれないが、ここでケインズはマルサスの冴的な状況とそれからの脱却を想定しているとみることもできる<sup>11</sup>。マルサスの冴とは、生産力が増加しても人口が大きく増加するので一人当たりの生活水準が上昇しないという現象だが、ケインズは、今後は、資本蓄積と技術革新による生産力の増加、その一方における人口増加の鈍化により、一人当たりの生活水準が大幅に向上するとみているわけである。

ここで感じとって欲しいのは、ケインズの時代を見る目だ。これは、現在の日本は長期的に低迷して悲観論も強いが ICT 技術や AI の発展などで長期的には高度に発展していく可能性があることを見落とすなどということを行っているのではない。逆の状況として、仮に高成長の中にあっても、それはあだ花に過ぎないと反省することもできる。資本蓄積の黄金律というものがある。人々の幸せ（効用）を最大化する経済成長のあり方を示す定理だ。ばかみたいに投資して過剰に資本を蓄積しても、生産や経済成長率は高まり一見経済は繁栄し人々は浮かれているが、それは目的とするものを最大にする最適な経済成長ではない。ケインズは、ルイス・キャロルの'Sylvie and Bruno'の教授を引き合いに出して富の蓄積が自己目的化する愚かさを指摘し、価値を手段の上位に置き、善を有益なものよりも尊重することを主張している。ただ、これについても、ケインズのブルームズベリー的な価値観を皆が受け入れるべきだと言いたいわけではない。現下の悲観的状況に目を眩まされて目先の

---

<sup>10</sup> 近代の始めに存在していた重要な技術は、歴史の黎明期に既にあったとケインズは指摘している。なお、人類の生活水準の変遷とそれに伴う技術革新については Ian Morris, *Why the West Rules, for Now?*を是非参照されたい。

<sup>11</sup> 人口の増加にもかかわらず生活水準が 4 倍に上昇したと指摘しているのだから、実際にはマルサスの冴にあったとみているわけではないが、そのメカニズムを念頭に置いていたという意味で。

泥沼からの脱出だけに狂奔するのではなく、底流する長期的なトレンドを見据えてどのような経済・社会を構築していくかを構想することは大変重要なことであるということだ。

来るべき経済・社会の構想をするというのは簡単にできる話でもないので、まずは、その前提となる潮流の変化を見極める目を養って欲しい。ケインズの時代、1930年代の大恐慌ということもあつたであろうが、当時の人々の意識がマルサスの世界から抜け出すことができていなかったのではないか。確かに、既に19世紀には産業革命による生産力の飛躍的増大は現実のものと感じられていたであろうし、1920年代は大変な繁栄の時代であつた（「狂瀾怒濤の20年代」という言葉さえある）。しかし、それが本当に長期に持続した場合の経済の姿を思い描くことは容易でなかつただろう。

ケインズは、想像力を羽ばたかせて、100年後に期待できる経済生活のレベルとそこで実現する経済・社会はどのようなものかを考える。「[ケインズの時代から]100年後に生活水準が8倍になることは十分あり得ることであるが<sup>12</sup>、・・・その時、経済問題はほぼ解決しているであろう。」[そうした豊かな社会の]経験を積むにつれて、新たに得られた豊富な自然の贈り物を「より良く使えるようになるであろう。

「我々は進化の過程において、経済問題を解決するような本能を発展させてきた」が、「人類史上初めて切迫した経済的必要性から解放される。」ただ、「かなりの期間はいくばくかの労働をすることは人生の満足にとって必須となるだろう」が、それは一日3時間もしくは週15時間の労働にとどまる。

そして、最後に、経済的可能性が開花することにより極めて大きな社会組織・制度の変革が可能になることが指摘される。「富の蓄積がもはや社会的に重要でなくなった時、倫理規範が大きく変わるであろう。」「富の分配と経済的報酬に関する社会的・経済的慣行は、それがどんなに忌わしく不正なものであっても、資本蓄積に有益ということで正当化されてきた。それをいまや捨て去ることができるのだ<sup>13</sup>。」心が揺さぶられるような文章だ。経済政策かくあるべしということを考える一助として、是非読んでいただきたい<sup>14</sup>。

---

<sup>12</sup> ケインズは、持続的成長の効果を複利計算によって例示する。「(資本ストックが) 毎年2%増加すれば、20年で50%増、100年で7.5倍になる。」

<sup>13</sup> 余談だが、生産力が増加した結果、本来的に価値のある活動に従事できるようになるという発想は、マルクスの、高度な生産力を革命により奪取して「能力に応じて働き必要に応じて」というユートピアを実現させようという考え方と共通するものを感じる。あるいは、孔子の「衣食足りて礼節を知る」か。

<sup>14</sup> なお、ケインズの予言が成就しなかつた理由を当代一流の経済学者達が論じた論文集として Pecchi and Piga, eds., *Revisiting Keynes* があるので、興味がある人は参照されたい。

本書は 20 世紀最大の歴史学者の一人マルク・ブロックの主著であり、歴史学を大きく変えたアナール学派の代表的な名著と言えよう。

ただ、この本をピンポイントで推薦するというよりは、経済学の勉強をする上で、多様な分野の多様なアプローチを知ることが有益であるということの例として挙げたい。他に様々な本があるが、それらは最後に列記するとして、この本が出版 80 周年ということで代表選手とする。

本書から感じ取ってもらいたい最初の点は、社会を理解するには、制度の形式的な分析ではなく、自然環境や経済・技術的状況、人々の意識や心の持ち方（心性：mentality）など様々な側面を生き生きと理解することが必要だということである。「社会を統御する制度の枠組みは、結局、人々を取り巻く環境を全体として知ることによってのみ理解することができる。」これは人々の生活の条件と心の状況をそれらの相互作用の中で理解するということであり、前者は物質的・経済的条件、後者は人々の感じ方・考え方のことである。一つ、印象的な文章を引用しよう。「あらゆる社会生活の背後に原初的なものの深淵が存在し、人々は制御し得ない力に蹂躪され、自然界では、明暗の対比のような性質間の二項対立は強烈で容赦のないものであった。...そうしたことが彼らの粗暴さに影響しなかったと考えられるだろうか。」

多様な側面の相互作用を分析することから、ブロックは、様々な学問分野の研究方法を援用する。次に感じ取ってもらいたいのは、こうした学際的アプローチである<sup>16</sup>。ブロックは心性すなわち人々の心のありようを追求したので、心理学的側面を重視したのは確かであるが、実は、集合的記憶のような集団的な観点を重視した社会学的分析であり、これは偉大な社会学者デュルケームの影響であるという（Hughes）。

---

<sup>15</sup> 翻訳（ブロック『封建社会』）はみすず書房（2分冊）と岩波書店から出ているが、岩波版は絶版、みすず版も第一分冊は品切れとなっているため、原著を挙げさせてもらう。私が学生時代に購入したみすず版は就職時に処分し、就職後に購入した岩波版も差し当たり参照できる状況ではないので、文中の日本語訳は、手許にある原著を素人の私が適宜訳した。ちょっと踏み込み過ぎた訳になっているところもあることは、ご容赦いただきたい。

<sup>16</sup> Hughes, *The Obstructed Path*. 以下、ブロックの学際的アプローチについては多くを同書に依拠している。翻訳（『大変貌』）もあるが、現在は絶版。

また、地理学的観点も基本的な役割を果たしている。例えば、農業の生産性が低かったので十分な土地を確保するために集住地は離れて存在していたが、集住地内では盛期中世における無秩序による安全上の問題から固まって住んでいたとか、「耕作地は荒野を一時的に征服したに過ぎず、自然は絶え間なく耕地を荒野に戻そうとしていた」などの指摘は興味深い。さらに、語源学的アプローチも縦横に駆使した。例えば、'prudhomme'という言葉の意味の変遷を手掛かりにして騎士が社会的存在から法的存在へ変化していった様子を解明した部分は大変見事なものである。なお、ブロックは、『ロランの歌』のような武勲詩などそれまで顧みられていなかった非伝統的な資料を活用したことでも知られる。

もともとブロックは経済史の専門家とみられていたとのことだ。そして、例えば技術革新が広く普及するには、技術についての人々のとらえ方 (popular mentality) の影響が決定的に重要であったとしている (Hughes)。

本書で感じとって欲しい第三の点は、物質的・精神的状況を生き生きと理解することは実際にはどのようなことかということである。ブロックの場合、生き生きとした理解は巧みな語り口に体现される。ブロックのやり方が唯一の方法というわけではないが、ブロックの語り口を味わってその深い洞察に思いを馳せて欲しい。ブロックは、特に、情感を喚起する語り口が巧みである (時としてメルヘンチックだ)。「獐猛な野獣というものは、[私たちにとっては、幼いころ]子守りのねえやばあやが語り聞かせてくれたお話の中にだけ現れるものであるが、[当時は]熊や特に狼が、あらゆる人けのない場所に、そして耕作された平原にすらも、うろついていた。」異界の恐怖がリアルな実感として迫ってくる。それを感じてこそ、立ちすくむ人々の心のあり方と行動が理解できるのではないだろうか。

人々の時間意識についても絶妙の語り人々の行動原理や社会組織についての考察へと誘う。「成人の平均的な寿命は短く」、また、「老年期は非常に早く訪れたようだ。現代の中年以降は老年であった。」「この世界はものすごく古い (年取った) ものであると信じられていたが、実は若者によって支配されてきたのである。」こうした時間感覚を持つ人々は、何を頼りにどのように社会を組織・制御したのだろうか<sup>17</sup>。どうでも良い些細な事だと感じられるかもしれない。しかし、レヴィ=ストロースは「地球は人類なくして始まり、人類なくして終わるのであろう」と言った (『悲しき熱帯』) が、彼が文化相対論に立って西欧中心主義を打破しようとしたことに、こうした時間感覚が関係したのではなかろうか。

---

<sup>17</sup> ちなみに、現代の我々は、138億年の宇宙 (あるいは46億年の地球) の中で70年から80年の健康寿命を持っている。

学者への興味は、その著作の内容もさることながら、人柄の魅力に惹き付けられてということが多いのではないか。ブロックの伝記は、その人物像に人気がある割に少ないが、既出の Hughes にある略伝に加えて、Fink, Marc Bloch: A Life in History はブロックの社会的・政治的状況や人間性及び学界での立ち位置などを（負の側面を含めて）生き生きと伝えてくれる。一人の誠実な人の生き様と学問への姿勢の記録として、読んで感じるころは多いと思う。

最後に、興味が歴史以外の分野にある人のために、経済を分析する上で参考となる視点を提供してくれると思われる他分野の書物をいくつか挙げよう。各分野の潮流は激しく遷り変わるが、あえて古典的な書物を挙げる。

社会の制度や構造に対する興味深いアプローチとして、ルーマン『法社会学』（法による社会統制のシステム論的分析）、ウェーバー『支配の社会学』（理念型）や「新秩序ドイツの議会と政治」（『政治論集 2』所収）、Habermas, Strukturwandel der Öffentlichkeit（市民（ブルジョア）的公共性概念の歴史的生成を、社会学、経済学、法学、政治学、社会史、知の歴史などの学際的アプローチにより分析：邦訳はハーバーマス『公共性の構造転換』）。

生物学特に進化生物学は、対象の性質からして、人間社会の分析に有益な手掛かりを与えてくれるだろう。ドーキンス『利己的な遺伝子』（The Selfish Gene：利己的な遺伝子が自己の生存のために生物体を最適に制御するという「見えざる手」を思わせる見方：私が学生時代に読んだ時は『生物=生存機械論』というある意味で親切な、今となっては残念な題名を付けられていた）、Richerson and Boyd, Not by Genes Alone（人類進化における文化の役割）、Bowles and Gintis, A Cooperative Species（人間の互酬性の進化：邦訳はボウルズ・ギンタス『協力する種』）、Gould, Eight Little Piggies（平衡断続移動説：邦訳はグールド『八匹の子豚』絶版）、Raup, Extinction: Bad Genes or Bad Luck?（生物進化における成功と失敗には、遺伝子の優劣だけでなく、偶然が大きな影響を与える：邦訳はラウプ『大絶滅』）、コンウェイ『カンブリア紀の怪物たち』（The Cambrian explosion!：原著は The Crucibles of Creation）、Lane, Life Ascending（副題：生物進化の 10 大発明：邦訳はレーン『生命の跳躍』）。

脳神経科学や心理学、哲学などからも得られる示唆は多いであろう。LeDoux, Synaptic Self（脳神経の物理的メカニズムが人間存在のあり方を決める）、Kahneman, Thinking, Slow and Fast（人間の思考のあり方の心理学的分析：邦訳はカーネマン『ファスト&スロ

一』)、Simon, *Administrative Behavior* (限定合理性及び満足化原理 : 邦訳はサイモン『経営行動』)、Deleuze et Guattari, *Mille plateaux* (モナド及びリゾーム : 邦訳はドゥルーズ・ガタリ『千のプラトー』)。

レヴィ=ストロースは神話の構造を分析する際に A. ヴェイユなどの数学者の助けを借りて群論 (あるいは **Category theory**) を使ったが (『構造人類学』)、数学の論理構造を経済や社会の分析に使う可能性は大きいと思われる。同著者では他に *La pense sauvage* (『野生の思考』 : ブリコラージュ)。